

中村彰彦



二
一
山
河

文春文庫

ふた さん が
二 つ の 山 河

定価はカバーに
表示してあります

1997年 9 月10日 第 1 刷

著 者 なか むら あき ひこ
 中村彰彦

発行者 新 井 信

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町 3 — 23 〒102

T E L 03 ・ 3265 ・ 1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-756703-2

文春文庫

二つの山河

中村彰彦



文藝春秋

目次

二つの山河

臥牛城がぎゆうじょうの虜とりこ

甘利源治あまorigenjiの潜入せんにゆう

解説 山内昌之

七

八

一六七

三九

二つの山河

初出／別冊文藝春秋

二つの山河 二〇七号

臥牛城の虜 一九九号

甘利源治の潜入 二〇六号

単行本 平成六年九月 文藝春秋刊

112 の山河

大正三年（一九一四）八月二十三日、日本は同盟国イギリスの要請に応え、ヴィルヘルムⅡ世治下のドイツ帝国に対して宣戦を布告、ミクロネシアのドイツ領南洋諸島の占領を急ぐ一方、中国山東省の膠州湾に面したドイツの租借地青島チンタオの攻略をめざした。

「東洋の真珠」

とその繁栄を謳われていた青島の、ドイツ守備軍はアルフレッド・フォン・メイヤー・ワルデック総督以下五千たらず。

対して八月二十八日に長崎を解纜かいらんし、九月一日竜口に上陸した日本軍は、神尾光臣陸軍中将以下、久留米の第十八師団に第三、第四、第十師団の一部を加えた約三万であった。

天津からきたイギリス軍一千と合して神尾中将を総司令官とした日英連合軍は、青島要塞に籠城して抵抗するドイツ軍にむかって十月三十一日から総攻撃を開始。十一月七日に至ってついに青島を陥落させたのである。

しかし、ドイツ軍の投降は決して恥ずべきことではなかった。圧倒的に優勢な連合軍に包囲され、孤立無援の戦いを展開する間に、かれらは日本軍に対して戦死四百十五、負傷千四百五十一の痛打を与えていた。

それに較べて、ドイツ軍戦死者数はわずか百九十一に過ぎない。四千七百九十一名が生き残って俘虜となる運命をたどった。

うち軍医や衛生兵を解放した連合国側は、傷病兵の措置はイギリスが担当し、残る四千六百余名を日本国内に輸送することにした。

かれらを詰めこんだ輸送船は、おおむね老朽化した四千トン級の木造貨物船、石炭蒸気船であったが、その乗船に先立って日本軍は持物検査や身体検査をあえておこなわなかった。

明治三十二年（一八九九）調印のハーグ宣言にいう。

《元来、俘虜将卒ハ祖国ノタメ戦闘ニ従ヒ、ツヒニ俘虜トナリタル者ニテ、ソノ境遇諒察スベキモノコレアリ候……》

日露戦争中、旅順陥落後の水師營の会見に際し、乃木希典まれすけ陸軍大將はステッセル以下のロシア軍代表団に帯剣を許し、その名誉のために映画撮影を禁じた。

おなじく日本海海戦に際し、島村速雄海軍少將は逃走をはかった海防艦アドミラル・ウシャークフに対してまず万国船舶信号によって降伏を勧告。同艦が戦闘旗を降ろさな

いのを見て撃沈させたが、その後すぐ乗組員を救助すべく磐手、八雲の両艦をその沈没海域に急行させた。

これら人口によく膾炙^{かいしや}した逸話は、一等国の仲間入りを悲願としていた当時の日本にあって、軍隊もまた精一杯国際法を遵守していたことを物語る。

青島のドイツ人俘虜たちが、のちのバターン死の行進や泰緬鉄道建設のための強制労働のような悲劇と無縁であったのは、このような時代の雰囲気はまだつづいていたからだ、というのが定説である。

かれらに乗せた輸送船は、大正三年十一月十六日から十九日にかけて日本の港に入った。印度丸と薩摩丸は門司港に、ヨーロッパ丸は広島港に、そして大東丸は神戸港に。そこからかれらは鉄道か船により、全国十二カ所に設けられた俘虜收容所へ護送されていった。

東京（浅草本願寺）、静岡、名古屋、姫路、大阪、松山、丸亀、徳島、大分、久留米、福岡、熊本。

しかしまもなく、福岡俘虜收容所に事件が起きた。大正四年（一九一五）十一月、五人の将校が相ついて脱走したのである。うちドイツに無事帰りついたのはひとりのみであったが、これによって收容所側は態度を硬化させた。

脱走続出の後、福岡の收容所長は、再発を防止すべく俘虜たちに誓約書の提出を命じ、

俘虜全員の顔写真を撮った。ほとんどの俘虜は誓約書の提出に応じたが、中にはそれを拒む者もいた。

所長はそのような者に対しては、手紙の送受、毎日の散歩、外部への遠足などを含む特典の保留で対抗した。その罰則は、影響を受ける俘虜だけでなく徹底した收容所側の諸検査と相まって、所内に根深い不満を生じさせた――。

問題は、ほかの收容所でも次々に起こっていた。

久留米俘虜收容所はもつとも悪名高く、かつてここに收容されたドイツ人たちは、今日なお「日本の強制收容所 (Japanisches KZ)」と呼んでいる、という報告もある。K^{カイ}ツエツトZとは、ナチスの作ったあの忌まわしき強制收容所のことである。

この久留米俘虜收容所最大の問題点は、所員が俘虜を殴打することが規則として認められていた点にあった。その所長は、真崎甚三郎中佐。のち大将に昇り陸軍参謀次長、教育総監となるが、二・二六事件の陰の指導者とみなされて失脚する人物である。

この真崎所長みずからが俘虜を殴打し、問題となったのは、大正四年十一月十五日のことであった。

この日久留米俘虜收容所でも大正天皇即位の大典を祝い、俘虜ひとりにつきビール一本、りんご二個を配付した。だがベーゼーとフロリアンの両将校は、日独両国がなお交戦中であることを理由にこれらを返却した。すると真崎は怒り狂い、やにわに飛びか

かつてふたりを殴り倒したのである。

大阪や松山の所長も高圧的で、所員たちもその風潮に染まってドイツ人俘虜たちを苦しめた。

次第に俘虜たちは、援助の手をさしのべてくれるキリスト教団体などを介し、本国へ苦痛を訴えるようになった。ドイツ外務省はこれを重視し、まだ中立国であったアメリカに対して日本の俘虜収容所を調査視察するよう求めた。

こうしてワシントンから訓令を受けた駐日アメリカ大使ジョージ・W・グースリーは、二十三歳の三等書記官サムナー・ウェルズにこの調査を担当させることにした。ハーバード大学卒業のウェルズはドイツ語も話せ、のちフランクリン・ルーズベルト大統領の特別顧問となる切れ者である。

大正五年二月から三月にかけて全収容所をまわり、俘虜たちへの面接調査をつづけたウェルズは、百二十ページにおよぶレポートをまとめてグースリー大使に提出した。アメリカの歴史学者C・バーディックとU・メースナーは書いている。

《彼は松山、徳島、丸亀、大阪、福岡、静岡、久留米等で一般的に収容所が過密状態にあることを認め、これを批判した。多くの古い建物や寺——これらは収容施設の主体をなしているのだが——がヨーロッパ人の居住にすべて不適當であると判断した。さらに彼はもう一つの問題が捕虜たちを深刻に悩ませていることに気付いた。一般兵士のため

に作られた営倉はがいして小さく、平均四・五メートル平方で、天井も非常に低く、ふつうのヨーロッパ人が真直ぐ立つことができないほどだった。

《けれども彼はいくつかの収容所における過密状態を批判する一方、日本政府の、状況を改善しようという意図をも見逃さなかった。》（略）

場所の不足する他のいくつかの収容所でさえも、ウェルズは捕虜たちと当局の間に協同の気風を見出した。その好例は徳島で、捕虜たちの不満はただ一つ、食事の単調さだけだった。（略）

ウェルズの目に久留米と大阪の状況は徳島とは逆に映った。（林啓介訳）

食事の単調さ以外にはまったく問題のない、俘虜たちと当局の間に協同の気風の存在する徳島俘虜収容所――。

その所長は四十四歳の陸軍歩兵中佐で、名を松江豊寿とよひさといった。

一

それまでの松江豊寿中佐は、徳島歩兵第六十二聯隊附、経理委員首座という役職にあった。それが徳島俘虜収容所の開設にともない、その所長に任じられたのである。

この俘虜収容所は、供出された徳島市富浦町の二階建ての県会議事堂とそれに隣接して建てられたバラックから成っていた。収容人員は初め百九十五名、のち二百八名に上

ったのに対し、居住区域の面積はわずかに九十平方メートル。

その息苦しきは久留米同様であったが、ウエルズが徳島を高く評価した背景には、松江中佐と真崎中佐の天と地ほどの気質の相異があった。

真崎中佐は、俘虜たちを精神的、肉体的に抑圧すべき対象とみなしていた。一方松江中佐は警備兵たちにかなる暴行も許さず、俘虜たちに対して人道的に接するよう求めつづけた。

この頃、松江はよく語った。

「かれらも祖国のために戦ったのだから」

これはむろん、だから戦争がおわってドイツへ帰還できる日まで大切に扱ってやるべきだ、という思い——いってみれば、松江個人の「武士の情」に発したことばであった。

松江はまた、

「ドイツ人俘虜たちの中には学者や技術者が少なくないから、その指導を受けたい場合は所轄の商工会議所を経て申し出よ」

と俘虜情報局が通達する以前から、かれらの持つ知識や技術を大いに摂取すべきだ、と意見具申していた。

松江は俘虜情報局の許可を得て、まず腕のいい技術者をほしがっていた市内の木工所に俘虜六名を派遣した。かれらが一週間で蒸気エンジンを修理すると、エンジンは故障